

平成二十八年 江戸川看護専門学校 入学試験問題

国語 (二次試験)

注意

1. 指示があるまで開かないこと。
2. 試験時間は五十分とする。
3. 受験番号、氏名を解答用紙に正確に記入すること。
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. その他の注意事項は、試験官の指示に従うこと。

一

次の①～⑮の各文中の傍線部のカタカナを漢字に直せ。

- ① オン健けんな思想。
- ② カン急自在きゅうじざいな話しぶり。
- ③ 時ときコこクく表ひょうを見る。
- ④ ガイ当者たうしやは申し出よ。
- ⑤ 解かいシしャゃクくと鑑賞。
- ⑥ 選せんタたクく科目。
- ⑦ 異常いじやうカかツつ水。
- ⑧ カかツつ色しきに濁る。
- ⑨ ボウ績工場しんこうじやうを営む。
- ⑩ 守備ボウ害しゆびぼうがいで進塁。
- ⑪ 海うみをナなガがめる。
- ⑫ 新聞しんぶんにノのる。
- ⑬ ショシしよしんンん表ひょう明めい演えん説せつ。
- ⑭ 力ちからのキきんコこウ。
- ⑮ 橋はしをカかける。

三

次の①～⑩のことわざに関連の深い四字熟語を後のア～コの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ① 目は口ほどにものを言う
- ② 幽霊の正体見たり枯れ尾花
- ③ しり馬に乗る
- ④ のれんに腕押し
- ⑤ 手前味噌を並べる
- ⑥ 二階から目薬
- ⑦ 先んずれば人を制す
- ⑧ 備えあれば憂いなし
- ⑨ 身から出た錆
- ⑩ 歲月人を待たず

- | | | |
|--------|-------------------------------|----------------------------|
| ア 自画自賛 | イ 以心伝心 | ウ 用意周到 |
| エ 馬耳東風 | オ 隔靴搔痒 <small>かつかさうよう</small> | カ 疑心暗鬼 |
| キ 先手必勝 | ク 付和雷同 <small>ふわらいてう</small> | ケ 無常迅速 <small>じんそく</small> |
| コ 自業自得 | | |

二

次の①～⑩の各文中の傍線部の漢字の読みをひらがなで記せ。

- ① 目めが粗こい。
- ② 他たに秀ひでる。
- ③ 弱者じやくしやを虐あげげる。
- ④ 流行りやうが廃はいれる。
- ⑤ 自分じぶんを戒かいめる。
- ⑥ 厳げんかな式しき。
- ⑦ 朽くち葉は色しき。
- ⑧ 戯あそれの恋こひ。
- ⑨ 一いつ家け言げん
- ⑩ 不ふ文ぶん律りつ

四

次の①～⑤の各文中の空欄に入れるのに最適なものを、それぞれ後のア～オの中から選び、記号で答えよ。

- ① () をさる…数人いる中で最初に発言する。
 ② () をさる…戦いや試合などを開始する。
 ③ () をさる…自分自身で負担する。
 ④ () をさる…鋭いことばでまくし立てる。
 ⑤ () をさる…惜しげもなく大金を使う。

- ア 札さつびら
 イ 口火
 ウ 啖たん呵か
 エ 身み銭ぜに
 オ 火蓋ひふた

五

次の①～⑤の各説明文に該当する作品名を後のア～オから、作者名をa～eからそれぞれ選び、記号で答えよ。解答欄には作品名・作者名の順に記すこと。

- ① 写実主義を唱えた最初の近代的小説論。
 ② 言文一致体で書かれた最初の近代写実小説。
 ③ 日本で初めて書かれた自然主義の文学。
 ④ 写生を唱え、和歌の革新を論じた歌論。
 ⑤ 口語自由詩を完成した詩集。

(作品名)

- ア 破戒
 イ 小説神髓
 ウ 月に吠える
 エ 浮雲
 オ 歌よみに与ふる書

(作者名)

- a 島崎藤村
 b 二葉亭四迷
 c 坪内逍遙つぼうちしやうよう
 d 正岡子規
 e 萩原朔太郎はぎわらさくたろう

六

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ひとつの見方をすれば、近代的市民社会は、時間を個人のものにしたのである。それが近代的な個人の本当の意味かもしれない。関係的時間から個人的な時間への変化。(ア) 時間的な存在である人間たちが、共有された関係の中にか時間世界を確立できないかぎり、人間は自分の存在を自己完結的にはつくりだせないからである。自分だけの固有の時間世界を所有することによって、人間は他の一切から独立した存在になった。

肯定的に評価すれば、それは私たちが、他の何者にも干渉されない自分だけの時間をもったことを意味する。私たちは、この点において、自由人になった。

ところがそのとき、近代人たちは自分が新しい^①カダイを背負わされていることに、気がつかなければならなかった。そのひとつは不安に関する問題であり、第二は自分が生きていくためには、時間を取引しなければならぬという問題である。

もし時間が自分だけの固有のものであるとするなら、その時間には、始まりと終りがあることになる、いうまでもなくそれは生をもって始まり死をもって終わる。ここでは死は時間の終焉^{しゅうえん}である。ところが他者の時間はそこでは終わらない。死をもって終了するのは自分の固有の時間だけである。

(イ) 自分だけの固有の時間を所有した近代人たちは、それゆえに、他者の時間は終了していないのに、自分の時間だけは終わってしまうと

いう不条理に直面しなければならなくなった。そしてそのことが、自分の時間の終りに対する解決不可能な不安をいだかせる。自分だけの固有の時間の確立は、自分だけの固有の死とともに、時間世界から自己を^②ソウシツさせるのである。

この一人で迎えなければならぬ時間の終焉という現実が表現していることは、固有の時間が普遍性をもっていなかったことの、逆説的な^③ヒョウメイである。なぜなら、時間が固有のものとして成立する以上、時間はバラバラなものとして各自に分解されており、それぞれの時間がその終了するときに予定している。ここでは、時間は普遍的な存在ではなく、個別に終了していく。

ところが、そんなふうには時間存在が各自バラバラになるにつれて、逆に共通の時間の客観化がすすんでいった。主体的な時間が普遍的なものではなくなるほど、普遍的で客観的な時間の^{そてい}措定が求められるようになっていったのである。

それは時計の時間の「物神崇拜」を成立させた。時計の時間は、さまざまな時間基準のなかのひとつではなく、唯一の時間として、人間の上に^④クンリンする絶対的な「神」として客観化されたのである。その結果近代社会においては、各自が固有の時間を確立しているのに、その固有の時間は、逆に自由な時間存在が成立しないで、誰もが共通の時間世界のなかで存在する。近代において成立した固有の時間は、時計を基準にする絶対的な時間世界に支配されることによって成り立つという自己矛盾を生み出したのである。固有の時間の成立は、同時に自由な時間存在を否定する絶対的な時間世界をも成立させた。前者においては固有なものとして時間が存在しているのに、逆に後者では、固有な存在として

の時間が否定される。

こうして私たちは時計の時間に身をゆだねながら、しかし自分自身に与えられた時間は、自分だけの孤独な時間として理解するしかなくなったのである。そして、その必然的な結果としての孤独な死、時間の孤独な終焉。

それが近代人のかかえる矛盾のひとつであるとするなら、もうひとつの矛盾は、固有の時間を確立した人間たちが自己の時間存在を維持するために、時間を取引し、そのことによって自分の存在をも取引しなければならなくなったときに生じたように思われる。

いうまでもなく私たちが自分の時間を取引する代表的な私たちは、賃労働の形態のなかにあらわれる。経済学ではそれは労働力を^④シヨウヒンとして売買する行為としてみなされるけれど、その労働力は労働者の存在と不可分な関係にある。(ウ) その存在は、つねに時間的存在としてつくられている。私たちの存在は、時間性をもたないかたちでは成立しえない。その結果、労働力の売買は、つねに時間の売買をとまなうかたちでおこなわれ、自己の時間存在の売買として成立せざるをえなくなるのである。

しかもさらに重要なことは、何故自分の存在時間を切り売りできるのか、という理由そのもののなかにあった。すなわち、時間が各自の固有の時間として成立していなければ、時間を売ること自体が不可能だったのである。

村人が自然や村の共同社会と関係していくとき時間も成立している、というように伝統的な山里の時間のものとは、時間は村人一人一人の手に分解されてはいない。ここでは、関係とともに時間があり、時間と

ともに関係がある。そしてそのような時間は、けっして切り売りできないのである。この時間世界のなかに村人は「仕事」を成立させた。

(エ)、「稼ぎ」の時間は切り売りすることができる。それは各自の固有な時間であり、それ故にそれを売ることができるのである。すなわち、固有の時間が成立しているからこそ、私たちはその時間を切り売りすることができ、また時間を切り売りすることによって、私たちは時間を自分の固有のものとして確立していく。

だから「稼ぎ」は山里の時間の否定のように村人は思えてくる。「稼ぎ」をとおして個人的な時間が確立されていけば、その分だけ山里の時間が崩れ去っていくだろう。

一人一人に固有な時間、すなわち個人的な時間の確立を時間の売買の成立は、分けることができるのである。近代人たちは、一方で個人的な時間を確立しながら、その時間とともに成立している自分の存在を維持するために、その個人的な時間をときに売り渡しながら、それを存在のための手段につかう。何という自己撞着であろうか。自分の固有の時間を手段としながら、そのことによって、自分の固有の時間を維持するのである。

自然や人間が互いに交通しあいながら、その交通のなかに共有された時間を成立させた時代から、時間が一人一人固有のものになった時代への変化は、一面ではこのような現実を生み出している。

(内山節『時間』の十二章)による)

問一 傍線部⑦～⑩は熟語の一部であるが、これにあたる漢字を含むものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

のを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

⑦ カダイ

- 1 いとこはガンカ_カの医者である
- 2 隣の家はザツカ_カ家であった
- 3 彼のニツカ_カは散歩である
- 4 人々はスンカ_カを惜しんで働いた
- 5 この食品はテンカ_カ物を含まない

⑧ クンリン

- 1 巨大な建造物がリンリツ_{リン}していた
- 2 彼の行動はリンリ_{リン}的に問題である
- 3 キンリン_{リン}諸国への影響が心配だ
- 4 車のコウリン_{リン}が歩道に乗りあげた
- 5 予定外のリンジ_{リン}収入があった

⑨ ソウシツ

- 1 彼は意気ソソウ_{ソウ}したようだ
- 2 シヤソウ_{ソウ}から海が見えた
- 3 犯人のソウサク_{ソウ}が行われた
- 4 彼女のチャクソウ_{ソウ}は素晴らしい
- 5 世の中がブツソウ_{ソウ}になってきた

⑩ ショウヒン

- 1 噂のダイシヨウ_{ショウ}は大きい
- 2 帳簿をショウゴウ_{ショウ}する
- 3 兄はシヨウサイ_{ショウ}にたけている
- 4 隣家へのルイシヨウ_{ショウ}は免れた
- 5 彼の発言はシヨウキョク_{ショウ}的だ

⑪ ヒヨウメイ

- 1 現代をヒヨウジュン_{ヒョウ}に考える
- 2 途中経過をコウヒョウ_{ヒョウ}した
- 3 船が島にヒヨウチャク_{ヒョウ}した
- 4 そのヒヒョウ_{ヒョウ}は正しい
- 5 トウヒョウ日_{ヒョウ}は一週間後だ

問二 文中の空欄ア～エに入れるのに最適なものを、次の中からそれぞれ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|
| 1 | むしろ | 2 | しかも | 3 | あるいは |
| 4 | すなわち | 5 | なぜなら | 6 | もちろん |
| 7 | ところが | 8 | そして | | |

問三 傍線部A「他の何者にも干渉されない自分だけの時間をもったこ

とを意味する」とあるが、これは日常の具体的な場面に即して考えるとすると、どのようなことであると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

1 夜間の会合に供えて私は、夕食の支度が出来るまでのわずかな時間を利用して仮眠を取った。

2 家族の者と顔を合わせるのがきまづく感じられた私は、朝食を取らずにそのまま学校へ出かけた。

3 人見知りをする性格であった私は、作業場でも保田の人々からなるべく離れて、黙々と仕事に打ち込んだ。

4 早起きの苦手な私ではあったが、この夏は家族の負担を減らすため、積極的に水汲みに出掛けた。

5 私は、毎日、父の書斎から難しそうな本を持ち出してきては、自室にこもって明け方まで読みふけた。

問四 傍線部B「時間は普遍的な存在ではなく、個別に終了していく」

とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 近代人の時間は、共同社会内に存在する共通の時間から独立したものであり、他者の所有する時間存在とは個別に個人の死をもって消滅することになるということ。
- 2 一人一人の所有する時間の長さは生まれ落ちた時から決まっており、近代人であってもその制約を越えて生を長らえることは不可能であるということ。
- 3 近代人には人の生が永遠に続くなどという発想はとうてい受け入れられないものであり、限りある生を意識した状態で一生を送ることになるということ。
- 4 近代人が個人個人で時間の所有と管理を行うようになったのがきっかけとなり、共同社会から時間存在の共通性が次第に失われるようになったということ。
- 5 近代的市民社会においてはそれぞれの人によって時間に対する感覚が微妙に異なっており、一日が終わるのを長く感じる人も短く感じる人もいるということ。

問五 傍線部Cについて、筆者はなぜ「近代において成立した固有の時間」が「時計を基準にする絶対的な時間世界に支配され」ていることを「自己矛盾」というのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。

- 1 個人の自立の基礎であり、近代市民社会の理想である「固有の時間」が確立されるにつれ、人々の関係的な時間に対する思慕も高まりを見せるという事態が出現したから。
- 2 近代人の中には「固有の時間」こそが自由な生活を保障する基盤になるという共通理解があったが、その共通理解に反し、その時間に人が従属させられるという結果が生じたから。
- 3 関係的な時間から脱することで成立したのが「固有の時間」であったはずだが、この個人が所有した時間も結局は時計時間という共通の時間世界を必要とするものであったから。
- 4 他者との時間の共有状態を脱することによって「固有の時間」が解放されたという歴史的事実が忘れ去られ、時計時間という非人間的な時間が入り込むことになったから。
- 5 近代になって「固有な時間」が成立したにもかかわらず、文字通り機械である時計に縛られ、近代的市民社会からゆとりある自由時間というものが失われてしまったから。

問六 傍線部D「関係とともに時間があり、時間とともに関係がある」

とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1〜

5のうちから一つ選べ。

1 村人相互の強固な結びつきが個人的な時間を変質させ、関係的な時間の普遍性が確立されていたということ。

2 村の生活には人間関係を円滑に保つための時間が豊富にあり、それが良好な人間関係を育んできたということ。

3 村が共同の仕事場であることが共通の時間意識を芽生えさせ、成因の結束を強固なものにしてきたということ。

4 村人が個人的な時間を村の共同社会の時間に合わせさえすれば、その社会の一員として認められるということ。

5 自然や村人との関わりのなかで一つの時間世界が成立し、その時間世界に基づいて人間関係が形作られるということ。

問七 本文の内容について説明したものとして適当なものを、次の1〜

6のうちから二つ選べ。

1 共有された時間存在が個人のものとなることで近代が始まった。しかし、この時間存在を個人で担うということは近代人にとって重荷以外の何物でもなかった。そこで、人々は共同社会復帰のための武器として万民共通の時間である時計時間を利用するようになった。

2 近代的市民社会では時間は個人的なものとなったが、そのような固有の時間はあくまでも個人的なものでまとまりのないものであった。さらに固有の時間の存在は逆に共通の時間的尺度を必要とし、その結果、時計で計れる時間があたかも唯一の時間であるかのように見なされるようになったのである。

3 共有された関係からの自立とは、共有された時間からの自立であると同時に、共有された人間関係からの自立でもあった。ここに近代という時代の困難があった。人々は時間的な面での自由を得たかわりに他者との人間的なつながりを失うことになり、誰にも看取られぬ孤独な死を迎えることになった。

4 近代の時間は共有された時間を個別の個人に分割する形で生じた。この時間の分割は共同社会に生きる人々の団結を破壊するという事態を生むことになったが、一方では、男女、子供を問わず社会的な平等を実現するという役割を果たすことになった。

5 個人の時間は、関係的な時間のなかに埋もれていた個人の時間を解放することによって成立した。この近代に特徴的な時間は、その成立と同時に不安と孤独の意識を生じさせることになった。近代は、人々が社会的なつながりを求め、賃動労という形での社会参加を目指した時代であった。

6 近代は共同社会の共有された関係から人々が脱し、個人の独立が達成された時代と考えられる。しかし、この過程で人々に個人的な時間の終了を意味する死への不安が芽生えたほか、個人的な時間の確保のためには時間の売買をしなければならぬという矛盾した現象が生じることもあった。

国 語 (二次試験)

受験番号

氏名

得点

六			五	四	三	二		一		
問三	問二	問一	①	①	①	⑥	①	⑪	⑥	①
	ア	ア								
問四				②	②					
	イ	イ				かな	い			
問五			②	③	③	⑦	②	⑫	⑦	②
	ウ	ウ								
問六				④	④					
	エ	エ	③	⑤	⑤	ち	でる			
問七						⑧	③	⑬	⑧	③
		オ			⑥					
			④			れ	げる			
					⑦	⑨	④	⑭	⑨	④
					⑧					
			⑤			⑩	⑤	⑮	⑩	⑤
					⑨					
					⑩		める			